

# 『部落差別って何やる？』

朗読者 角岡 伸彦

9

被差別部落、同和問題というと、「昔のことなんじゃないの」とか「よくわからない」といった声が聞こえてきそうです。

私はその被差別部落で生まれて育ちました。それは息をするように自然なことで、母親は家に来た銀行員にも、普通に「ここは同和地区やで」と言っていました。

10

「お母ちゃんは差別されたことあるん？」。

中学生になって、自分が生まれた地域や部落の歴史などを勉強して、私は母親に聞いたことがあります。

「別に、お母ちゃんはないなあ…」。

15

そんな両親の下で育った私は幸せだったのかもしれない。それでも同和問題は、のどに刺さった小骨のように、長い間、私の心の底にありました。

20

新聞記者だった私は、ずっと同和問題についての報道や表現に物足りなさを感じていました。活字にしろ、映像にしろ、そこに描かれる部落は、悲惨で、暗くて、マイナスイメージばかり。私はいつも、「それだけやないやろ〜。おもしろい奴も、笑える話もあるで」と思っていました。

私が調べた限り、部落の描かれ方はこの半世紀、ほとんど変

わっていません。実態は確実に変わっているのに、現実とのズレが年々大きくなっているように感じます。

差別がなくなった、というわけでは決してありません。地域や世代によって、今もさまざまな差別があります。でもほとんどの被差別部落出身の人たちは、僕も含めて、四六時中、差別に悩み、差別と戦っているわけではありません。それぞれ普通に暮らしているわけです。でも、日常会話の中で、思いもよらない差別に出逢うことがあります。

以前、阪神・淡路大震災のあとに、家を買ったという人と話したことがあります。

「そこがコレやってん」

その人は、そう言いながら、部落を指す差別的なジェスチャーを僕に示しました。僕が部落出身者であることを知らないから、そんなことができたんでしょね。

「ああ、そうですか…」

それしか言い返せなかった自分が情けなくなりました。このように、ありふれた日常の中に、差別の問題は今も生きています。

部落差別ってなんやろ？

なんでこんな問題が今も残っているんやろ？

ラジオを通して、みなさんと考える時間を共有できればうれしく思います。